

火の手が上がり、何でこうなったのか、この先どうなるのか、不安と疲労で足も思うように進みませんでした。

戸町までたどり着くと、佐藤さんという父の知り合いが「このまま直行するのは無理だ」と、防空壕に泊めてもらいました。元氣を取り戻した私たちは、翌朝早く出発し、無事目的地に着くことが出来ました。

翌日から私と、すぐ下の妹は夜明けとともに起き、おにぎりと水筒を肩にかけ、片道四里（約十六キロメートル）余りの道を毎日歩いて通いました。自宅から所帯道具や着替えなどを持てるだけ運んで、帰り着くのは日暮れになってからでした。父と母は、食糧の買い出しに走り回る生活でした。

あれから四十七年、本当に我が国

は平和で豊かになりました。一方、世界に目を向けると貧困や争いが絶えることなく続いています。全世界が豊かで、平和になるよう祈るとともに、皆さんとご一緒に核廃絶を訴え続けて行きたいと思えます。

